

# 東日本支部だより

2005年2月20日発行

Newsletter of the East Japan Chapter, the Society for Research in Asiatic Music

## 定例研究会のお知らせ

### ◆東日本支部第 18 回定例研究会

時 2005 年3月 19 日(土)

所 東京藝術大学

○2004 年度 卒業論文・修士論文発表(その1)

### ◆東日本支部第 19 回定例研究会

時 2005 年4月2日(土)

所 お茶の水女子大学

○2004 年度 卒業論文・修士論文発表(その2)

※詳細につきましては、ちらしをご覧ください。

## 定例研究会の報告

### ◆東日本支部第 16 回定例研究会

2004 年 12 月4日(土)

お茶の水女子大学 共通講義棟2号館 102 教室

## ●研究発表とディスカッション

### 1. 植民地台湾における公学校唱歌教育の研究

—植民地期(1895 年～1945 年)を通観して—

岡部芳広(東京都立国際高等学校)

(発表要旨)

発表者の学位論文を再構成し、植民地期の公学校唱歌教育を概観してその特徴を述べた。公学校とは、台湾人児童が通う初等教育機関であった。約 50 年にわたる植民地期を通して見た場合、公学校唱歌教育は、「明治期から大正前期」、「大正後期から昭和初期」、「戦時期」の3つの時代区分に分けて考えられる。まず最初の明治期から大正前期は、国語教育や修身教育を補完する立場として唱歌教育が行われた時期で、教科の自立性は低かった。その事実を、台湾総督府発行『公学校唱歌科教授細目』(1905 年)を、東京高等師範学校附属小学校発行の唱歌科教授細目と比較分析することにより、また、台湾総督府発行『公学校唱歌集(全1冊)』(1915 年)の教材分析を通して論考した。その後大正前期から昭和初期にかけては公学校唱歌教育も

大正新教育運動や童謡運動などの影響を受け、教科の自立性を高め、芸術教育を志向するようになった。それは、台北師範学校附属公学校が1921年に発行した『公学校唱歌科教授細目』を分析することによっても明らかで、また、この頃の公学校教員の実践には、木戸春市や砥上種樹のように、児童中心主義的立場で唱歌教育を展開した教員もみられた。またこの時期の唱歌教育の潮流を集大成するかのごとく、台湾総督府は1934年から1935年にかけて新しい教科書である『公学校唱歌(全6冊)』を発行した。この教科書には童謡運動の影響を受けた教材が多く含まれている。そして、1936年以降、いわゆる戦時期に入ると唱歌教育は皇国民練成のための手段とされることとなるが、それが顕著になるのは、1941年に小公学校が国民学校に再編されたときからである。日本の文部省が国民学校芸能科音楽用に発行した『ウタノホン』や『初等科音楽』は台湾総督府により台湾人向けに再編集され、『ウタノホン上』、『うたのほん下』、『初等科音楽一』、『初等科音楽二』までが発行されたことが明らかとなった。これらの教科書には、戦争の悲惨さを隠蔽する教材や戦争を美化した内容の教材がちりばめられ、皇国民養成としての意図を明確に読み取ることができる。また、聴覚を発達させ軍事的に活用しようと、「音感教育」もとり入れられた。このような3つの区分は前期武官総督時代、文官総督時代、後期武官総督時代の区分とほぼ一致し、公学校唱歌教育が植民地統治のひとつの装置として、その役割の一端を担ってきたということがいえる。

## 2. 植民地台湾における公学校唱歌教材をめぐる 論議について

—「折衷」と教材の郷土化を焦点に—

劉 麟玉(四国学院大学)

(発表要旨)

本発表は、在台日本人教員が伊沢修二の音楽教育における「折衷」という考え方との関連において、唱歌教材や台湾の在来音楽をどのように考えていたのか、また台湾人がどのような唱歌教材を望んでいたのかという問題について、明治期の日本人と台湾人が書いた教育関係の雑誌記事を分析し、考察したものである。

本発表で注目した高橋二三四は東京音楽学校出身で伊沢が上京した際に台湾に連れ帰った人物である。彼が在任中の台湾総督府国語学校の定期演奏会プログラムには「洋琴」と「風琴」による《六段合奏》や台湾人の「清楽」演奏など多様な音楽が登場している。この時期、高橋は国語学校の唯一の音楽教師であり、これらの曲目は高橋が「和洋折衷」という音楽取調掛の理念を実践した事例であると考えられる。更に、高橋は台湾の民間音楽と教育の関係に関して「漢洋折衷」という考えを雑誌記事の中で提示している。

一方、初等教育現場では、ほぼ同時期に唱歌教材に関する異なる論議が始まっていた。日本人教師は日本の歌で描かれる風景や事物が台湾に馴染まないと、台湾の唱歌を作る必要性を説いた。唱歌に台湾語を用いることも提案され、教育関係雑誌には躰のため日本

唱歌の旋律を使った替え歌も紹介された。更に、台湾人によって書かれた雑誌記事には、台湾語の歌詞を使って唱歌を教授することにより、生徒は歌詞の意味を理解し、それを歌うことによって徳性が涵養できると、唱歌を台湾語で歌うことの必要性を主張するものもあった。

実際、明治期から大正期にかけて台湾で作られた唱歌の数は増えている。これは台湾の歴史・風土に合う歌を作るべきであるとする当時の日本人教師の意見が実現された結果であり、当時の出版物の中には、明治期の台湾において台湾語の唱歌も作られたという記述も見られる。

どんな言語で唱歌を歌うかが台湾の音楽教育界で議論されていたという事実は、当時の教師の一部が唱歌に関して旋律よりも歌詞に含まれている教訓的、美徳的意味を重視していたことを示すものである。また、郷土的内容を持つ教材を使うべきであるという考えはその後も国語学校教員によって継承されていったが、高橋の「漢洋折衷論」や漢文歌詞を持つ歌の使用は台湾の唱歌教育の流れの中では一時的なものであり、高橋が台湾を去った後の唱歌教材には、「漢洋折衷論」や漢文歌詞を持つ歌を使用すべきであるとする意見は反映されていない。

(コメント・川口明子)

植民地台湾における公学校唱歌教育をテーマとする最新の2本の博士論文を元になされた今回の発表と討議は、ポストコロニアルな状況を迎えた今、実にタイムリーで有意義な企画であった。

岡部氏の発表では、明治期から戦時中に至る公学校唱歌教育を3つの時代に分け検証したが、政治・社会状況とも絡めての歴史的解釈や、国語教育から芸術教育へのシフトに対する分析など、説得力を持つものであった。続く劉氏の発表では、唱歌教育をめぐる意識を「折衷」をキーワードに考察した点が興味深かった。「和洋折衷」を目指した日本の唱歌に対し、高橋二三四の「漢洋折衷」論や魏清徳の台湾語唱歌への提言等、台湾人に適した唱歌を模索した動きが明治期に一時的にせよあったという事実は、注目に値する。

フロアからも、朝鮮半島やマイクロネシアの事例と比較しながら、日本語教育と現地語統制の問題、西洋音楽様式の受容と近代化との関係等、植民地での唱歌教育を検証する討議が活発に交わされた。特に今後の課題として岡部氏も提示した、台湾人の唱歌教育をめぐる受容の研究は、唱歌体験者の高齢化もあり急がれるテーマであるが、具体的な方法論の難しさも指摘された。また、台湾は先住民(高砂族等と呼ばれてきたが現在ではあえて「原住民」を使用)と明清代からの漢人移民を合わせた「本省人」と、国共内戦後に移住した漢人「外省人」との複雑な関係を抱える多民族国家だが、日本の唱歌教育の展開の中で、逆に「台湾人」としてのアイデンティティーは芽生えたのかという鋭い質問も出された。これは、今回は取り上げられなかった「原住民」のための植民地教育の問題も含め、今後も問い続けていくべき重要な課題だろう。研究者同士やインフォーマントとの「対話」も含め、お二人の研究が継続的に展開されることが望まれる。

## 東日本支部からのお知らせ

東日本支部長 加藤富美子

このたび東日本支部の支部長をお引き受けいたしました。永原恵三前支部長のお仕事に学びながら精一杯努めたいと思います。今期もすでに数ヶ月が経過していますが、ここに支部委員会活動の現況をお知らせするとともに今期の課題について述べ、ごあいさつとさせていただきます。

例会の開催と支部だよりの発行が支部の主な活動ですが、今期の支部委員および参事の構成は幅広い研究分野にわたる中堅、若手のすぐれた研究者から成り、各担当ごとに独立して非常に意欲的に活動を推進しています。各担当の企画による原案は、常に支部長および関連する委員、参事にメール上で配信され、意見交換が行われた上で実施案を確定していくという方法を取り、情報の共有・集約を行いながら常に全体計画の中に各担当が位置づくよう努力しています。

前期では支部例会と機関誌との連携や合同例会などに大きな成果が見られました。今期もそれらを継承しながら、博士論文発表の場をより多く設けるなど、さらに充実した支部活動をめざして参りたいと思います。皆様からのご意見・ご希望をぜひお寄せくださいますようお願いいたします。

東日本支部委員とその担当(2004~2005年度)

- 1) 支部長 加藤富美子(例会・支部だより兼任)
- 2) 例会運営 内田順子、薦田治子、高桑いづみ、塚田健一、中村美奈子、丹羽幸江、野川美穂子、増野亜子
- 3) 支部だより 遠藤 徹、小塩さとみ
- 4) 経理 大貫紀子、樋口 昭
- 5) ホームページ 小日向英俊、茂手木潔子

## 定例研究会発表募集

東日本支部では会員の皆様による活発な研究活動のため第20回及び第21回定例研究会での研究発表等を募集しております。発表を希望される方は、発表種別(研究発表・報告等)、発表題目、要旨(800字以内)、発表希望月、氏名、所属機関、連絡先(住所、電話、Fax、E-mail)を明記の上、東日本支部事務局までお申し込みください。

### ◇第20回定例研究会

2005年6月11日(土) 午後1時から4時

場所:お茶の水女子大学

内容:民族舞踊学関連の企画

### ◇第21回定例研究会

2005年7月または9月

日時と場所は未定

東日本支部事務局は、下記に移転しました。

\*\*\*\*\*

発行: (社)東洋音楽学会東日本支部

編集: 遠藤 徹、小塩さとみ、加藤富美子、

大木聡美、黒川真理恵

〒184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1

東京学芸大学 音楽・演劇講座 加藤(富)研究室気付

Tel/Fax:042-329-7576

E-mail: katomi@kf6.so-net.ne.jp(加藤)

\*\*\*\*\*